

特41

996

海軍
軍艦
乗毛



滑稽 浄土佛 船 栗毛 第三編

東都 橋塘伊東專三戯作

第三回

佛郎兵衛が改めた其法螺乃音は驚うされし田舎者の真に受く 七「夫どろ
 彼も委敷知てお出なさるたア主人間業で有めへうや思ひやす 弗「素よ
 り我の人間ならむ六年以前信田ふて悪右衛門ふ狩出さきた吾儕乃親の孤
 此精靈ぞ 七「アニ主狐れ子ごとへ道理で狸野郎ぞと思つと 弗「エと混つ
 反すお絡老爺め 七「吾儕が主の事状狸野郎と言て主が吾儕の事を絡老爺
 といふと動物館の望見とやうで能くねへるら夫のハア廢ますべエ早く
 珍聞のう聞して下さる 弗「エヘンく 然ら萬國巡りの珍聞母掛らふうと

弗郎兵衛の容体らしく先茶を一杯グツと飲み 弗「そもく吾儕の我母三十三歳の時丹頂を夢見て産しうは初の鶴千代と名附しが其後故有く亀千代と改め成人するに従ひく一を聞くと十を知の才智人は勝れ初犬猿子の子三勇士を従へ鬼が嶋へ寶と取り行き歸ると其ま、學問修行の其爲も駒込の吉祥寺に入り讀書算術 弄術 劍術 槍の寶藏院流長刀の與御殿流馬の 大坪流の河童川流きこせあらねども八月に流す質草より利上を爲く取止り一寸入用の其時の捨利で借着的槍栗算段家も在るうと思ふ間もあく 忽然としてお蔵は在り朝ふ火鉢と飯櫃を送つ夕母博多結城の裕一を 九死の中に一生を得さするなごな是れ六陷三略の巻に在り其外。琴。棋。書。画。木琴。月琴。借金の辨解。辨護。代言。勸解本訴の事の更あり刑法。治罪法。徵兵令。新聞條例の胸に納め茶は湯の千家の裏表のら新道中通り三等煉瓦防火線路の土藏にしろ屋上制限のブリキを張れ香を利方花乃生方

炭團乃生方の勿論はと茶立前より續いゝの家乃建前地形はしるゝ木造崩し乃意氣なる辭で近處に女が迷えせゝ事もあり其上線香は立方も知くゝ一時間に玉が何本お約束で圓助の御祝義の場末へ行ても有はしめへど 流義くゝと究めてゐれば富本流。常磐津流。豊後流。清元流。歌澤流。義太夫流。河東流。一中流。岸澤流。宇治流。猪善流。トツチリトン流。浪花流。大津繪流。ヘラくゝ流。萬天子流お蔭參りの全者は惚く附ちや行れを泣別きやいふまで心得てゐるのだ嗚呼口が酸むくなつた 七「何だる些も諺んねへが大分面白さうだ然して吉祥寺の一件はどうしましたノウ 弗「サア是ら吉祥寺の一件は掛るのだら聞つせへ 七「ハイくゝ 弗「其所で吾儕が吉祥寺へ行く常磐津流富本流 七「エと夫のモウ解ありやした 弗「夫の其處だけ抜にして學問なされし背後から膝でつゝいて目で知するに何者あるぞと振返る此方の一間に聲高くヤアくゝ奥州の夷安部の貞任

源氏の大將九郎判官見參せんと呼えつて立出たり。市川團十郎。梅
 が谷藤太郎。竹本播磨大夫。歸天齋正一。乃人々あまきば備の先年紀州なる日
 高川の邊に捨たる娘清姫が八百屋お七を姿を代へ此吉祥寺まで附慕
 ひ石に成たる松浦方將門山の古御所母妖怪變化住家を求め燈蛾や小室の
 花盛り風も引ぬふ累ね夜着千も二千も三千も怪氣の女の慎む所ろ病氣の
 男の苦む所ろ戸板返一のお岩の亡魂小佛小平の藥を下せへ流ま〜て深
 川の三角屋敷寺門前打込浪よしつなりと女に成て筒持せ油斷の成ぬ小娘
 も小袋阪母身の破れ悪い浮名も龍の口御難一會日蓮様お經の功才、
 然ど妙法蓮華經如來壽量品第十六自我得佛來。所經諸劫數。無量百千萬。
 億載阿僧祇。常說法教化。無數億衆生。令入於佛道。爾來無量劫と讀ども讀
 ども功力なく龍耳一雷神盲目に化物感じが無のでコリヤ行ぬ此度の神
 道圃一掃溜でいふいトフカミのお核ひ〜吐普加身惠美多女坎良震異離

坤兌乾。核ひ給ひ。清目出給ふと核ひ母核つと大核ひ半金拂ひの夫ならで
 清淨潔白流き川で尻と洗つとやう母〜ので先夫までの桂中納言教氏卿
 御苦勞さふと敵味方着する冠装束も現れ出たる武智光秀全じ羽色の鳥
 翼本夫の歸りの遅さよと女房相模が侍乳山帆上と船が見ゆるぞへアレ鳥
 が啼く鳥の音とと吉祥寺をば立出て幸手。栗橋。古我。間々田。芳流閣の側
 へ来れば憐む可〜犬塚信乃の親の遺言記の名刀心よ占つ身ふ附つ艱苦の
 中ふ時を経て得が〜時得て〜のべえる〜許我へ齋〜名を揚家を
 興す可う〜その福の禍とふ〜代〜たる村雨の刃の旧の物ならで我
 身を劈く響とどあ〜一感をこ〜一釋よ〜もなく絆急母〜意外母あ〜僅
 に當座の辱を避けやと思ふばかりに影の圍を切開き〜芳流閣の屋の上
 に攀登きども左右母脱き去る可き道のあけきば其所に必死を究めたる心
 の中いりありなん想像だふいと痛ま〜夫と見るより踊入〜和女をん

おの名でお伊勢さん神樂がお好でせつびさどのどい福大黒を見さいませ
滅多矢鱈踊る折から全行二人を記せども一人の大悲の影頼む阿波の十
郎兵衛の娘お鶴負むる促装と事變り山伏姿の武藏坊四天王を始と一と思
ひ思ひに姿を換喜望峯母て敗走せし英國の那翁を興州巴里まで落さんと
安宅の關へさし掛る中よの富樫の左衛門宗貞何と關兵衛よ景氣で有
まい々斯る山路の關の戸よ山伏おんどの怪しなれ目下すたつと豊年おこ
しホツ／＼法螺を吹ならん一体そさまの風俗掛嚴敷中ふ藝者の往來二局
送りの櫓倉馬車罰金沙汰もお上の慈悲是でも懲ぬう／＼と金剛杖をふり
上て打々々と打据まば禿みどりが取継り露の尾花と寐たといふ尾花の露
と寐ぬといふアレ寐ぬといふ寐ぬといふ尾花が穂よ出く現まのの忘れ
草でも飲ごのだらう此腹帯のどよぞいのお半に言きて面目おく吾儕
の在所へ立戻まばアノ山家屋へ嫁入してせ言ども聞ねば詮方おく然らば伊

源氏物語

東の愛子たる河津の三郎祐安を撃て遺恨を晴さんや安元二年神無月與野
の狩の歸るさし椎の木三本小橋よ取待間程なく駈來るの新政厚徳の大隊
長西郷隆盛桐野利秋。篠原國幹。小田春永。自由改進借金黨銅貨天保文久
錢金貨銀貨も寄來るふいざふき來れや矢項を計り鎮西八郎爲朝傳授菅原
傳授の手習鑑十三策三伏の弓よ響の羽矧ぐる矢を番ひよつびたヒヤウと
切て放せば過誤づ次信殿の胸板よ發矢と立ち真逆さま目前家采が撃れし
ふ争猶豫のなほ可たぞと勢力富五郎神樂獅子の大八の赤壁山の麓にて和
藤内母引別き「夕立や刈穂の庵の奥山よ戀ぞ積て水くるとい」と一首の
歌を残せしはコリヤ是新古今の歌此歌に添削せし耐だ／＼耐武士の加藤
繁氏高野へ登つ坊主よ成り昨日矧とも同心一昨日矧とも同心今の
憂身よ比ぶれば一年前よ此園が死る心母成あんご妻子が歎も賢母もつと
も此下總の佐倉領二百三十九ヶ村の惣代と成る宗五郎雪の降をも厭えは

源氏物語

こ夢女の念力見えぬ目も杖を力に轉つ轉びつやうく 茲も川の側ノウ川
 越達駒澤次郎左衛門といふ武士のモウ川をお越なされとか未の聞しく聞
 してといふ聲さへも息切の其妙藥の日本橋區元大阪町の高木で賣る清心
 丹に清婦湯此清婦湯の血の道の大妙藥胃散の本家を呉服町太田で賣が一
 ちよい備東國に至ると妻戀稻荷が大明神燈を強力稻荷に近た吉原町の
 神林桂木太夫母惚られしを父の敵の伴左衛門模様も雲も稲妻で六法出立
 の廊通ひ遊女高尾が靡ぬながら金母明く身受な一三股川の船の中で釣
 一切を可哀想など立聞相撲の額川谷藏己が古郷の植生村へ歸つた後名
 状改め雲の戸重右衛門を名乗しが鬼が嶽の其爲は雪踏を以て面と打き遣
 恨の刃は死されれば下女のお初も身も世もあらず又者ありとも奥庭へ忍
 び込つ、扇岩藤阿容く生して置可さかき駈出す向ふの揚幕のら轄く轄
 く聲と掛市川流の柿の素袍東夷南變北秋西戒これを文字つといふ時の當

時活版國益編輯それつらく 唯見れば大恩教主の秋の月の生死長夜の
 闇を照し朝は桃李の粧ひあも夕母を白骨をあけ穴賢く せお文さんを
 讀上た戀の嘉諾文鼠に引れ吾儕が國さで見せとい物にや自慢をいふ時紀
 文が米を沖の暗いれに白帆が見えは渠を紀の國ヤレコラ是の密柑船入
 船千艘出船千艘品川の娼妓買を乗込瀛車が十分間五錢の切符でビイガラ
 がラ夢も通えぬ唐土の事を更あて歐呂巴天竺よてる浄飯王の一子と生れ
 一悉達太子父上初め耶須陀羅女が留るも聞を袖ふり振ひ夫婦と成り凱陣
 の後そんなら和郎が其時のお兒さんで有たかいなアム、書寫山の鬼若丸
 じやと言れく吃驚信州の新志代權三郎といふる假名實を雲霧五人男の一
 人と呼る、山猫三次所る青山百人町で鈴木主水といふ武士を女房幼推も
 ある其中で春の花咲く新宿通ひ紺の暖簾母桔梗の紋水色淺黄丹深な一た
 ゆを真先掛て押立たゆる四方天但馬頭敵を京都の本能寺と森蘭丸を打取

八重垣姫

西局



久松

光秀

兼光
子



く賤が嶽へと引上げあどを附たは姐妃のお百造り一罪も深川ある六萬坪
 母其本夫桑名屋徳兵衛被殺したのち追附瀧田の愛妾ふ立身出世す由
 と桃川如燕の講釋よて説ども聞ぬ忠兵衛が意氣張づくの封切うら梅川連
 て新口村石原道も果敢どらねど或る巡禮古手買思ひく姿を襲すも亦
 井景昭詮義の手曼イデや微塵は碎んと魏の曹操も百萬の軍勢引連差掛る
 長阪橋の其上ふ士卒もあらず只一騎駒の足並止めしを燕人張飛う就えト
 とどつと敗走し笠着落千早赤坂ふ籠城も日本一の忠勇智臣楠廷尉正成
 が藁人形や釣堀や糞攻火攻を厭えねど義理と情母ひしがまぐる此節々が
 推多思ひ夫ほど切ない事あがら知ぬ事是非もあ一此上のお情けよる寧
 殺し下さんせと頼と救出す身の覺悟遊女ながらも感心る阿古屋も情夫
 景清が行方を言ぬ強情者モウ此上は我々が城を枕は打死すと勢ひ込だ
 る家中の諸士を止し大石内藏助が大望のある連判状讀下したる文体を屈

原既母放きく江潭遊ぶ澤畔に行吟す顔色憔悴形容枯稿漁父見く之を問
 て曰く三百餘里を覆壓して天日を隔離一驪山北ふ構く而しく西に折る二
 川溶々としく流れて宮牆に入り五歩一樓十歩一閣巨口細鱗狀松江
 の鱸の如し清漣ふ濯て而く妖ならす中通じ外直く曼せむ枝せず朋有り速
 方より来る又樂まざん乎身體髮膚之と父母ふ受く敢て毀傷せざるの孝の
 始なり山高さが故ふ貴からむ木有を以て貴しとを一つ鶴鷹道遠を好み無
 益の殺生樂む事曾子曰く十目の視る十手の指所ろ其れ嚴ふゆうなと言
 母側うら堪へぬ岩永イヤナニ朝顔とやら其所に定めて冷るで有らう身共
 が側で今一曲サ所望どくハツと答へる荒木又右衛門神酒徳利の口ふせ
 し越前奉書取より早くグツトいいて青眼母じりくと附入りしを十二
 小癩おと獅子れ荒れ水も溜らぬ籠釣籠殺氣を合む村正の佐野は名とる
 次郎左衛門當るを幸ひ吉原の百人切と今の世まで尊は残まど知あがら油

屋お紺の愛想づらゝを賣と思ひし福岡貢身も裾川の流き汲汲む遺恨や
 方取た儘母太刀風の宮雨の宮二見が浦に立浪の跡を濁せし九紋龍赤松林
 の暗紛き夫と知を戦ひしを豫て相河花和尚魯智深容子試問は情なや金
 る女房賣た金打留たるを舅どのと腹を切たる勘平が菩提は為と夕暮母西
 へ行名の西行法師佐藤兵衛憲清と中へ右幕下頼朝公よ賜る黄金の
 猫股屋敷越後母もある七不思議野暮とお化を箱根のう此方よないと究く
 置たゆうく通る鈴が森丸橋忠彌が磔刑と白子屋お熊が火炎と並ぶ死
 散の其許で雉子も鳴むを討れめへと獨言して行んとせし誰も白井の權八
 次お若へのお待なせへと止たる唐犬權兵衛と二世の契りの蝮蛇お由塵塚
 お松と諸共母屋敷育のお嬢さんも貧苦母迫れば何となく血は混えれば赤
 羽根や憂目を三田の三角で辛ひ動え芝金お札の辻での人殺しを確に村井
 長庵と認た人入忠藏が後の證據お成ととも梅は三浦の小紫一夜節とも氣

は掛ると氣を紅葉傘白張の如何此身が誓やといふて二人が裾へ狩衣を
 刺貫ぬきし音の豫護天勾踐空くまを事莫れ時よ范蠡なきよしも非すと
 櫻の幹を押し削り書記し、る備後の三郎寫真のお若く鬼神のお松まつを愛
 しの辛ひもの一里登れば不動の窟歌單計が浮物りと浮たくの浮調子顔
 は漆たる紅葉乃青葉は繁る夏木立そく恨多て曉天の別きの鳥と皆人れ
 憎れ口なアレ啼といふ聞せともなれ耳よく人乃口よる戸が立ちまを裏
 店社會の夫婦喧嘩やつさもつさも明日の新聞お出る世界お世事で丸め
 く浮氣でこねて小町櫻に眺に飽ぬ扇巴や文車の和女も共母と言たいが
 いと一和女を手は掛く如何なる物り存命く我なきあとして一遍の回向しや
 うとてお姿を繪ふに書しにせぬ物を浮てりもめの一二三イ四ウいつう吾
 妻へ筑波根の耕雲齋に一味なき征解論に立しうど動議起りて詮方なく肥
 後熊本よ引退た神風連を設立なき前原一誠江藤新平徒黨は武士の四十七

人阿彌陀が峯の邊なる博覽會へと着よると湯さへも飲を体みもせを鏡
 舌續て苦いさと堪へをりーが堪へ切を五臟六腑の胸先へせぐり来りて弗
 郎兵衛ウンと一聲叫びもあへを俯仰倒きて息絶たり此方の先より話説を
 聞ど何が何やら一向譯らむ話一の見珍喰やうで何の味がある事う知ぬな
 からも鏡舌の面白たま、聞てゐられど悶絶を、一吃驚し 七「サアサ
 ア事ご何でも仕舞よ此様事ふ成るだんべいと思つてゐたが到底大騒動
 の罷りえぢけたテ何ごか譯らねへ事を言てゐる中に面のう真赤ふし眼血
 走らせてゐたうら是稻荷でも附さんべいと思つてゐるうち是で捨ても
 置れぬへ藥でも吞せざア成めへと一人くどく言ところへ歸つて来る品
 ハが見まば主個の弗郎兵衛の眼を見張四肢を張り坐敷の中は倒れてをり
 側にい見知ぬ老人が馬士くとしてゐるに驚た品「ヤア弗さんの如何
 たのぞ然して和主の如何の人ぞ七「吾儕日本人ぞ品「エ、日本人の知て

あるが弗さんの如何したとゆふ事よ夫和主の何所の人間だ 七「人の名
 を聞よ自分の名をら名乗のが本統ご主は一体何人ぞ品「エ、地例体吾
 儕は茲の家の者だ 七「ア二茲の家の者ぞてハテ子譯んねへ事がある者だ
 茲の弗郎兵衛どんの家だら弗郎兵衛どんなら茲の家の者だといふ事も
 あり女なら内室といふ事もあるが男で家の者ちうの譯んねへ然つて歴
 人ノウ置やうな身代でえなし大方主の喰食か何うどんべい 品「喰客でも
 置ひでも大た母お世話ご他人の事計り詮索しく汝が事を言ねへの怪い
 野爺ご汝の晝鷲の空巢狙ひ茲の家へ盗賊は遠入く弗さんを殺したのだ
 ナ七「コレ途方もない事と言つせへ見掛に此様野爺でも砂村で百萬遍
 の球數を預る家柄だ物と何で人の家へ盗賊母遠入主個のウ殺さうぞ然言
 れての吾儕も合點あらねへ 品「成も成ねへも有ものう弗さんの敵だ汝ど
 うする見やアがまさと天窓と一つ張附る 七「ヤア吾儕が天窓ノウ喰えし

たる品「鏡棒め喰えせりも糞えある物かど又一つボカン七「又ハア歐た
 ア品「何を言アがろ藥鐘めど又不ろく七「此野郎痛くツて溜んねへぞ
 品「何を言アがろと又歐く掛る二人を必死の大喧嘩七も年こせ取ろ
 き岩疊造りの田舎野奔中々負ろ景状もあく此方も血氣盛んの壯者互に負
 じと争ふゆゑ四邊の物を踏毀し又蹴飛し、大騒動此物音を聞附た隣の家
 の甚駄兵衛吃驚おしく飛で来つ甚「マアくく」と止る間品ハも双の
 手で七野奔の咽喉元をグツト掴み息を止れば此方も苦し苦しまざれ
 腕を延し品ハが罌丸グツト握りなれば何ぞ溜らん咽喉の手と放しマウ
 ンぞ目を白く背後へ確と倒さるり此体を見て甚駄を驚た甚「オイく
 奔さん和主マア飛だ事をまろ吾儕が止し這入たら任せて置ばい、にナゼ
 此様事をまろのだ七「夫だつて打捨て置ば吾儕が咽喉を締られて殺され
 ろら詮方がねへ此譯だ甚「十二詮方がねへ事が有もおろ早くお醫師様



を聘まねで来こあつちやアいるねへ 七「醫師いしや様さまたア例いっせの玄白げんぱくさんかね 甚し「ナ
 二玄白げんぱくさんム、此所こゝに玄白げんぱくといふ醫者いしやをねへせ 七「ハ、ア成程なるほど玄白げんぱくちう
 る吾儕うらが村むらの醫師いしや様さまで有あつたはけ 甚し「エ、夫所それろじやアねへ早く行いて来きね
 へ 七「行いを行いけれど何處どこへ行いのた 甚し「此横町このよこまちへ行いと竹節たけのふしち竹庵ちくあんといふお
 醫者いしや様さまがあひから直ま来き下くださへと頼たのんで来きねへ 七「ハア恐かしこまりやしたと
 出でく行いつとあと甚駄兵衛がんたべゑも其所そこ等ら杖片かたづけ附つくのみ所そころへ間まもなく歸かへして来きて
 七「今直いままよお出いなざるはテ 甚し「夫それを大おほ丸まるよ御苦勞ごくろうだつた其所そこでお茶ちやの仕
 度たくをじてくんねへと言いくお門かど口ぐちあら「へい今日こんにちも只今ただいまにお使つかひを有あ難がた
 ふ 甚し「夫々それぞれお醫者いしや様さまが被い入れた 七「此方こちらへお上あんをせへ「ハイ有あ難がたふ御坐ごま
 いまを御免ごめんなさいと上あつて来きる女をんなの聲こゑゆゑ此方こちらも不審ふしんとよく見みれ
 ば是これを如何いかに醫者いしやにあらで此近所このまじまの驟あせく見知みしる年増としま藝妓げいぎ竹村屋たけむらやの竹吉たけきちが座
 敷しき姿すがたの左ひだりに襦じゆ箱はこ丁ぢやうの亀かめ杖づゑ供ともに連つれ素人座敷しろうとざしきと思おもつたのゝすつと連入はひて来き

りあがら 竹「オヤ甚しさん大おほ丸まるよ遅おそくありまゑと大急おほいそぎと被おつ仰しやましたけれ
 ど丁度家ちやうどやへお客きやくが来きる居ゐるもんでまうら堪忍かんにんして下くださいましヨオヤ弗ふさん
 も品しなさんも如何いかになまつたんでせうマア能よく寐ねく入いりつて何か寸法そんぽうの有あり
 裡たねでまね竹吉たけきちが来きるまで寐ねたふりとしてゐる来きたら呀やと言いく嘘うそ蜀しやくさうな
 んざアいけませんヨ中々ちやうちやうち其手そのてを喰くませんと一人吞込ひとりのみこんで鏡舌しやべつてゐるを見みる
 甚駄兵衛がんたべゑを采あれ果はく 甚し「マア待まちねへ竹吉たけきちさん諱なづを話はなさぬくはちやア諱なづら
 終つひへが茲こゝの主個あるじを鏡舌しやべつ過すく氣絶きせつをしてままい品公しなこうを茲こゝにある爺ぢいさんと取とつ
 組くみ合あつて罽せん丸まるを掴つかまれウンと言いつて終つひて詮方しやうかたがねへので今和いまわ女をんな所ところの並ならびの
 竹節たけのふしち竹庵ちくあんさんと迎むかひ違ちがひのどが間違まぢがへて行いつたらう 竹「オヤ、然さう
 ですり夫それやア大變たいへんですな間違まぢがひと言いふおがら吾儕わたしも平常ふたふ弗ふさんや品しなさんの
 御ご最さい員いんに成なりますもの見た計はかりじやア歸かへれませんらお醫者いしや様さまのお出い出でを
 るまで何なんぞ御用ごようを致いたさせうよ 甚し「流石さすがの竹たけチヤン能よ言いつお兵へいだ吾儕わたしも

一人で困つてゐる所ろどオイ爺さんおやさん和主わぬし如何いかしたんどいしや醫者いしやと石屋いしやと間違まちがるナア七偏人へんじん母も出てゐる一い亀文字かめもじと加茂次かもちと間違まちがるナア百川もくせんといふ落おし話はなし母もあるが醫者いしやと藝妓げいしやと間違まちがるナア主ぬしが始はじめくたぜ七「ハ、ア左様さやうウお主いしあん何なんでも早くはやく」と言いもんだうら吾儕わがら泡あわツ寝いて戸外かきへ出でると頓とんと名前なまのウ忘わまて仕舞しまひ何なんでも竹たけといふ字じ計はかりり覺おぼえてゐるから竹たけといふ醫者いしや様さまのウねへうと其所そこ等らをぐるく見みると提燈ていとうがぶら下さつてゐる竹たけといふ字じが二字書じふて有あらぬら茲こゝふちげへ有あるめへと行いたのだが然さういされて見みれば玄關げんくわんもなし藥取くすりとりもぬす格子造かみしづくりで意氣いぎ家うち宅うちどと思おもつた甚き「意氣いぎ家うちえねへ物ものど醫者いしやと藝妓げいしや屋やとい解わかり想さうな物ものど七「解わかる位くらへあら先手しんてうら行いのしねへ解わからねへから行いたのだ夫それだから吾儕わがらを先刻さつぎへい今日こんにちのと言いて来きるとさオヤオヤ美麗きれいな女醫者おんないしやが東京とうきやうといふ所ところの醫者いしや様さままでが美麗きれいだと思おもつてゐるとのだ甚き「イヤハヤ呆おぼれ返かへつゝ氣きの永ながへ男をとこど竹たけ「ソリヤアマア能よく御坐ごまいます

が早く竹たけの節ふしさんを聘よびに上あげせうと箱丁はこぢやうの龜かめ一い吟附いひつけてやる間まえなく竹節たけのふし竹庵ちくあん西洋醫者やうやういしやとて洋服やうふくで藥くすりの遣入はひこと草盤くさばんを携もて入い来きりちく「ハイ御免ごめんよ之これの甚おん太兵衛たへゑどのに竹吉たけきちさん大分たいぶんお揃そろひ急病きふびやうとのお報知しらせですが成々なる弗ふさん品しんさん双方ふたうも倒たふれてお出いてハ、ア喧嘩けんかうな定さだめも傷きずも御坐ごまさう一寸いちゆん診察しんさつ致いたさうと極ごく鹿か々々しい醫者いしやなれば一人ひとりで承知しやうちし吞のみ込こ顔かほ竹吉たけきちの可笑おかし思おもへど先弗まづふ郎兵衛らうべゑに枕まくらをさせ竹たけ「へいお願ねがひ申ましますと言いふ母竹庵おんちく心得こころえてちく「ハイくと言いふが側そばへ立寄たちよ脈みやくを見みんと手てと取とり吃驚びっくりし竹たけ「アレ先生せんせい夫それの吾儕わがらの手てでちく「成々なる是これのしまつたり道理だうりで乘やりい手てだと思おもつたテハア是これの壯健さうけんな脈みやくだが七「コレ何なにとするだへ夫それのハア吾儕わがらが腕うでだちく「ナニ君きみの手てうと今度こんどもまゝ吃驚びっくりしたかぬからぬ顔かほちく「イヤ筒様かやうな病人びやうにんの平脈へいみやくの者ものら先さきへ見みてゆりねば成なぬ事ことで是等これらの醫者いしやの意いなりと申まして漢家かんかの醫者いしやの稻荷いなかりの令使つかはしめと申ます位くらゐる事ことだてドレ今度こんどのすつうりと

見ませう成々息が止つてゐる故か丸で脈が絶てをる而て強く肉元凝てを
 り脈の側にグリ／＼が出来ましたア是の稀代な病だ 甚「モシ／＼先生其
 の足で御坐います ちく「ナニ足だと是のしたりと能々見まは足おれば發
 と思へど胡摩化／＼ ちく「成々是の足なるを先刻己母承知なれど脈の一
 体方々ふ在る物で手の脈を手脈といひ腹の脈を腹脈といひ足の脈は足脈
 といつ／＼都て災害の下から起るといひ病も足脈の起る者おれば一寸足
 脈の検査を致しましたのダテ此外産母掛るとさん脈といふが有て夫は續
 いて鑛脈。銅脈。金脈。炭脈。などいふが有て炭脈を掘當まは石炭などが出
 る者で御坐るテ 甚「其お講釋のあとで宜敷御坐りますすうら早くお療治を
 願ひます ちく「成々其所どころの心得たと今度の真誠ふ脈を取り打診器
 や聽胸器でたゝい／＼り聽り散々いぢり散し ちく「成々今診察せし病人
 の陰母あらを陽はあらを轉肝二つの境を出内に音あつ／＼外ふ音おし是ぞ

正しく空病人何者の仕業なるぞといふ体だてチト手遅れは成々のら中々
 療治のむづかしいテ 甚「先生さう被仰ますがタツタ今此様譯です ちく「
 ハテ子ハ、ア夫での病の基の何で御坐る 七「脈と取て見て置て譯んねへ
 醫者がある物か 甚「エ、黙止てゐさつせへ先生之の何で御坐いやすチト
 鏡舌過ま／＼箇様お始末 ちく「成々生も大方左様な事と推察致したテ左
 様承まえれば此病人母藥を吞せるの浪費で御坐れば藥を吞せむお治す一
 種奇方の療治が御坐るテ 甚「ハテ子 ちく「是の身体は在る丈の聲が残ら
 す出てしまつたので夫で氣と失つた解だから早く中せば大道で賣け風船
 玉を吹過てボカんと破た様な物で有るから何でも是の元の通り口から聲
 をたんと入さへすまは忽地生るのの知てあるテ之を空氣が腕て風船が地
 に落とすと全じ事なれば又空氣を入ませんで空へ登らぬ道理でとを西洋
 の大醫が發明されたを直傳の療治じやて然し何程口より聲計り入ても外

穴が明て、其所から漏て仕舞て何ふも成らぬゆゑ先目口鼻耳その他
 の穴へ残り必を按摩膏でもべこく粘て夫から口を明て弗さんやア—イと
 呼ならバ必を生返るからサア早く按摩膏を買よおやりなされいといふ甚
 駄兵衛の心得て箱丁の亀母按摩膏を買ひやり目とも言す鼻とも言をべこ
 べたと張附る ちく「ドレ此間品先生の診察を致さううと竹庵の此方へ
 来り先脈を取り其所等を敲き胸と腹を撫りあるが品八のホンの穢み翠丸
 を掴まきて氣絶せしが疾に心の附くおそれと餘り母懸ざが面白さま、黙
 止てをりしが久しく成バ小便が詰つて裂る程に成ども今更茫然と起る解
 一の行されバ矢張氣絶た積で轉覆つゝあるをり母竹庵の其所等バ
 撫廻しつゝ下腹の張てあるのを不審と思ひ手でグイ〜と押程一品八の
 モウ溜らを唧筒の口を向たる如く堪へ〜溜小便一時止じやつと放し
 しうバ竹庵の吃驚〜ちく「是の〜大變で御坐るテ愚老の着物も羽織も

弗郎之流



たけ吉

小便どろけど 甚「エ、飛でもねへ病人もある物だ氣を失つてゐて小便を
する奴が有る物う 竹「本統ふ品さんも漫戯者ですなへ 七「コレ漫戯者で
ねへ何でも氣が附くゐるよ違へねへ吾儕こそぐつて違へえと品への脇の
下とこそぐる此方の己よ小便を垂る上母こそぐられ今の可笑堪へ切す
一時母プブと吹出すよ 七「ソレ見さつせへ此裡野郎氣が附くゐやアがつ
よ違ひねへマツトこそぐつたら尻尾ノウ出すベエと又くすぐる 品「ア
アいけねへ〜苦しい苦しいモウ堪忍〜てくれエ、堪忍〜呉といふ母此
絡老爺めと足をむと〜やる時に足の先が弗郎兵衛の脇腹へ中ると云と
いふのも口の中やう〜氣が附き飛起とが渠の按摩膏を其所等中へ張ら
れたるゆゑ目も見えず耳も聞えを如龜利立たる耳なれば知るゝゝるほど竹
吉の見るより吃驚さやつと聲立今度の是が氣絶せし母 甚「サア〜事
ど二人氣が附たと思つたら一人死だ 七「夫どらハア差引おして見ると損

の行く事でもねへから打捨く置つしやる方が能るんべい 甚「どうして是
が打捨て置まる者のオイ品さん何までも死だ態をしねへでモウ能加減母
起さつせへと言れてやう〜起反り 品「儲起ま〜て結構を春只今の種々
御厄分（成）成まして有難ふ御坐ります只今迄の氣絶人の野郎計りて何の風
情も御坐りませんで〜とが此度の美麗い藝妓が氣絶してゐる上目の見え
ぬ耳の聞えぬヌツトかつ立と化物見たやうな人間がお景物で是がホンの
お年玉でないお人魂かと思えれます 甚「オイ〜品さん平氣で口上茶
番をしてゐる困るじやアねへ ちく「左様〜先づ弗郎君の氣の附と
事だのら早く按摩膏を刺して上させへ此竹吉さんの竹吉さんで僕能やう
ふ療治を致すから諸君少もお構ひあさらぬがい、品「へエ〜是の一寸伺
ひませう一体全体自然法躰病人が醫者を治すのが當然へでエ、地列体間
違ちやアいうねへ急給ふな ちく「イヤ誰も急を致さぬが君が急から悪い

ので品「夫での詮方がねへ吾儕が急としやうが醫者が病人を治すの當
 然と言ながら此竹吉計を一人受持で直さうとい無禮失敬縁息活計と中
 すよそ外のないてても今でこ此土地で藝者を致してをき素の十二
 万三千四百五十六石七斗八升九合と一摺半を取なさるお大名赤井御門守
 様の姫君竹姫様とやし上奉つて所へ此品八様が奴にお住込なさき毎朝
 毎朝お庭へ掃除は行と立浪の寄かど見えて寄もせでとか何といふのが
 馴染の發端で吾儕の爲は屋敷も出竟は藝妓をするやうお諱は成さのだ夫
 だら死も生るも吾儕と一所といふ位の中どの他人に療治をさきち
 やア吾妻つ子の面が立ねへ竹「オヤ品さん憚り様ですよ吾儕アモウすつ
 かり能く成ましとよと言きて吃驚背後をふり返り品「オ、竹吉さんモウ
 能のう何の事だへもつと氣を失つてゐれば能く而て誰が氣を附させたん
 だへ竹「何サ誰殿も何もして下さらないが自分で以て自然法縁と氣が

附さんです品「否よ人の口真似をするじやアねへる甚「マア竹吉さんの
 方の夫でい、から今度の弗さんの膏藥の方へ取掛らうと大勢掛りでビリ
 ビリくと按摩膏をえがす弗「ア、痛へくオ、苦しい何だつて此様目
 一會したんだ七「何だつても何もねへテ主餘り饒舌くおツ死だから穴を
 塞いで聲のを入る積りぞ弗「イヤ馬鹿くしい療治も程が有るぜ夫の
 い、が竹吉さんの何だつて茲へ来くるのだ甚「夫のウ先刺和主が氣
 を失つてゐる所へ品さんが歸つて来く何でも和主を此爺さんが殺しと
 んだと喧嘩を初め畢丸を掴まれて氣と失つてゐら爺さんよ醫者を呼で来
 てくれろと言と間違々竹吉さんを呼で来たので弗「夫で容子の分つとが
 オイ品公和主何だつて朝飯の跡も片附を何處へ行とのぞ品「へん何處へ
 行との事新しき言條うな常よの弗郎兵衛の所の養客の品八どが清佛戰
 争へ臨む時お至つて先一個の軍人だく軍人で有く見れば今夜よん生命

がむづうしい味よの板子一枚下の地獄といふ波濤萬里状隔て行のだから
 生命の有る中日本ある中甘へ物でも喰ふくつちやア話らねへと思ひ先
 刺戸外へ出てのら軍鳥屋へ這入て鍋が六枚酒が三合サ其所を飛出して
 向ふの汁粉へ這入汁粉が二杯母安部川が二盆夫から横町の天鉄羅屋で又
 酒が二合ふ天鉄羅が五人前其所でチト喰過と景状が有るのら運動の爲と
 鐵道馬車へ乗り圓太郎の真似をして喇叭を吹ながら観音様まで行く来て
 歸りふ髪を刈と湯へ這入茶を吞で来との感心だらう 弗「誰が感心する
 奴がある物う喰ひ抜母も程があらふ然いへば面や天窓が少し綺麗ふ成た
 様だ 品「綺麗ふ成つたつ成ねへたつて仲見世の岩床で慶坊の腕のい、
 所ろでチヨキく」と缺せ御膳お湯で磨く米と此様い、男の御面相を江崎
 の早車寫真ふ寫させく鏝の利と村越惣州母でも塗上させ新聞の公園地へ
 見世物に出して見おせへ男ツ切なしの女客計りでオヤ一寸みイキヤン御

覽よマア能男じやア有ませんう川崎やそつくりです子エアレ夫の違ひま
 すよ此方の容子の松嶋屋ですよイエく「エアチヤンの被仰のも違ひます
 よ吃然として遊い所が團十郎で意氣の所ろが菊五郎で優い所ろが松之
 助で本統にい、じやア有ませんう此方の何處のオヤ弗さんの所ろある
 品さんといふ方ですう吾儕此様方と添まるから生命も何も入ませんよ
 と言のい大しと物だらう 弗「エとやうましい誰が其様事をいふ奴がある
 物う此色發狂め 品「ダガサアマア有として置ねへな野暮な男だ 七「此人
 の能くべらくと鏡舌ながら唾のウ反させく汚くつと成ねへ 竹「品さん
 受よ金盞でも上ませうり誕が胸へ傳えつておますよオホ、ハ、 甚「品さ
 んなら金盞より馬盃の方が似合だらう 品「イヤハヤ情人の出来ねへ奴と
 いふ者の免角人の事と嫉んでならねへ此塩梅で行たらば餘り情人とする
 爲は仕舞ふに暗殺されるのも知ねへ 甚「夫のい、が間違ひとい言ながら



便人

ぢんぎょ

たご

たご



鑑

弗良

茶

品

竹庵さんお出なすつたし竹吉さんお甘く落合と物だらう一寸竝て立振舞の真似事をしやうじやアねへう 竹「本統も然てすよ先目出度お氣が附たから 品弗「夫がよりらう〜と是より其所等を片附箱丁の龜公を料理屋へ駐附させ酒肴状夫々母あつらへる中日も暮か、り涼く成しゆゑ其日の夜と、も母吞あうし竹吉竹庵甚駄兵衛の歸るあとの三人の蚊も喰るも知を寐てしまふ明日の朝母成り弗郎兵衛の目を覺し 弗「新曆でも旧曆でも夏に暑い物だが拂曉の強氣ふ冷つので目が覺とハツクシヨンエと未だ母目や鼻が痛くつて成ねへ飛だ所へ按摩膏を張やアがつとオヤオヤ品公も能くねるが此老爺も能くねるぜ品の野郎の金でも拾つた夢でも見ると見え頻りと鼻のら提灯を出しくるやアがる世の中は色氣のねへ面も多くあるが此位の色氣のねへ面の多くあるめへお目尻が下つて眉毛が上つて鼻が胡坐をかいてゐるといふの有が此奴のの寐轉んで尻と

垂くゐる様お鼻だオヤ〜此方の老爺も老爺だぞ生年を仕つて前後不覺お寐てゐやアがらア此斯の如何だへ野猪の鼻荒し芋畑を吹き倒すと言葉状どぞ然〜寐像の悪い事オヤ〜寐返をして翠玉を出した所ろ何とも彼どえ言ねへなア馬鹿〜い間拔老爺どといふ中品ハの目を覺し品「弗さん大さう早く目を覺〜とじやアねへか何も朝寐をする癖も然早く起ると白玉が流れ出るぜ 弗「遅く起て黒玉が流れ出候といふ事の聞たが早く起て白玉が流れ出るといふ事の聞た事かねへ 品「サア夫がソレ文明開化ご以前の随分黒玉の流き出と物だが西洋の醫者がどん〜究理〜く見ると一体白玉の眼は在つても無益な物で黒目勝おら見えるけれど白目勝おら見えねへから先流れ出すのの白目よ〜た方が徳用だらうといふ所ろ近年之は代つた様を譯で 弗「何を言てゐるんだ諾らねへ 品「諾らぬと言ひ些少な智慧儀うね 弗「その狂句の六代目川柳のだが何所で聞

来たのだ 品「何處も茲もある物の恐らく天地間の事の確乎と胸ふ納く居
品八先生在句位ありの魯を事だ此間も鳥渡吾儕がやつこのが有るうら山谷
にゐる七代目川柳の所ろへ行て見く見てもらつたら實に能く出来た此容
子てり吾儕の名が繼るから八代目にいやうと言たが俳優でも川柳でも八
代目と成た日よア大した者だ 弗「何といふ狂句だ 品「マア聞くくんね
へ斯いふのだエ下戸の持越モウ一むい迎ひ飯ヨ 弗「何だ此野郎言事ま
てが下司張てゐやアがらア其様句を川柳の所ろまで持て行たの 品「ム
ふやア 弗「夫どつて今持て行たら譽られて八代目ふするとか何とか言
ふといふやアねへのサ 品「夫がねへ自分でも餘り能く出来たから川柳
の所ろへ持て行たら大方然いふだらうと本の想像説でヤ一上奉つてい
く以上月日恐惶謹言ハイ一々といふ次第柄で真事よえや御怒傷様
見た様を譯柄だ 弗「何の事だへ人を擔やアがつく 品「擔で仕合せ是が人

だのら擔んごが借金あら踏でいまひ代物まら持て遣らア 弗「儲々不用心
な男だぞ 品「オイ一 弗さん昨日から聞うと思つたが一体此ぢいさんの
何所から来さんだへ 弗「ムは是う是の砂村お伯父御の所て伯母御が産と
したからと言く迎ひよよこしと極氣の永い人物だ 品「ナニ産の迎ひみ来
と奴だと如何氣が永いとつく人を馬鹿ふくゐるア泊り掛の迎ひなんぞ
といふ物の餘り感心した譯の物じやアねへ然して羊甲斐もふく能く寐る
じやアねへの耳の傍で此様に鏡舌てゐても未だ目も覺おけまば寐像も恐
し第一面が妙だね髪ツ面といふのの有が此奴のの面ツ髪た斯見た所ろの
草原へ外道の面を捨た様どオヤ一寐返りをく尻拭出しと 弗「なるや
ど汚ねへ尻だ毛だらけで肉が落ちて腫物のあとの有は所ろの如何くも
んだら馬車の馬といふ塩梅だのウ 品「是が本統の越後獅子尻といふのだ
弗「ナゼ一 品ハハ妙な聲だして 品「なんだら尻たゑとチ、チン 弗「エ

聲出さへ和主の面計りが親不孝のと思つたり聲迄が親不孝ど品「弗
 さんなんざア夫だるも困らア長唄の本味と言所ろの吾儕の聲は有のだ大
 した事状言様だが和風でも庄五郎でも皆な吾儕の聲を真似てやつ居の
 だが其所へも氣の附きねへのい恨だテ一寸寐床でやつてせへ此様者だ
 ら是が山臺へ登つて今度の彌十郎の正次郎の三味線一つ美音を發し
 た日ゆやア天下無類と言長唄は何だつて年が若くつて男が能つて程が能
 つく容子が能く面白くつて長唄が甘くつて三味線が弾て演説をして競馬
 をしく烟火を揚ぐ祝文を讀と来て居うら色男の開業式とや上奉りひとも
 決して恥うらぬ品八さんだてオヤ／＼弗さんの何の間母のゐる成
 たオイ弗さん／＼雪隠の中で弗「エと五月蠅何をいやアがけたりるし寐
 るゐた爺さん七「ハクシヨン品「借の専をしとのが知たと見え侍
 笑談 滑稽 清佛 船栗毛 第二編 畢

明治十七年九月廿五日御 届
 明治十七年十一月 日出版

定價金十錢

編輯人 東京日本橋區本石町壹丁目廿六番地 伊 東 專 三
 東京府平民 伊 東 專 三
 東京京橋區元數寄屋町三丁目七番地 三 嶽 寛 隆
 東京京橋區南傳馬町三丁目六番地 松 成 伊 三 郎
 東京京橋區南傳馬町三丁目六番地 松 成 堂
 同 各御最寄書店
 發賣元 東京麴町區飯田町三丁目拾九番地 東京金玉出版社
 賣捌所 印刷所

